

循環型工口複合木材システム開発

「もったいない」の気持ちに応える

展示会や店舗の空間プロデュースを手がけるゼオ（東京都渋谷区、黒井宏昌社長）は、使用済み木材とプラスチック原料を再成形した循環型エコロジー複合木材システム「ecolattice（エコラテック）」を開発した。展示会ブースに使用する木材パネルは、その場限りの使用で廃棄するのが一般的。せいぜい「木材チップにして燃料として使う程度」（黒井社長）だという。しかし、燃料にするにもニースがなく、処理コストがかさんでしまう。ゼオが開発した再利用可能なシステムについて黒井社長に聞いた。

ゼオ 黒井 宏昌社長



◎ゼオの創業は、「会社を設立したのは88年。当初は店舗プロデュースとイベントや展示会のプロデュースを半々で手がけていた。当時はバブル経済のさなかで、店舗の単価は良かった。でも、これは長く続かないだ

ろ」と思い、イベントや展示会の空間プロデュースに事業の重点を移していった。イベント・展示会関連では、空間デザインのほか映像クリエイターも照明プランニングなども手がける。もちろん、展示スペースのデザインと設計監理も担当する。

「概算だが、9平方材の展示スペースに出展した場合、ブースの建設コストは30万円程度だ。このうちの3分の1がボード類の費用。10万円分の木材ボードが廃棄されている計算になる。これは無駄だというのが90年度に欧州からアルミ製のボードとボードでシステムユニット化された展示ブースが輸入されたことがある。欧州の企業はエコロジーの姿勢が徹底しているし、展示ブースそのものに対するこだわりがない。でも、他社と同じ展示ブースを日本では結局広まらなかった」

◎失敗事例があるのに、なぜ循環型にこだわったのか。

「出展企業には、ボードを廃棄してはもったいないという気持ちがある。その気持ちは十分伝わっているし、それに応えたい。しかし、再利用する市場がない。木材ボードは燃料チップにして再利用するしかないが、ニースがないので処理にコストがかかる。産業廃棄物として処理した方が安いという実態がある。これでは、リサイクルできないだろう。米国ではトレーラーに展示用の資材一式を積み込んで、砂漠に保管するという方式をとっている。日本では保管にコストがかか

ってとてもできない方式だ。日本に合ったシステムがないかずっと考えていた」

「取引のある建材メーカーを通じて木材チップとプラスチック原料を溶解して成形した建材があることを知った。この建材をパズルのように組み合わせれば、インすれば展示ブースが作れるのではないかと思ったのがエコラテックを考案するきっかけだった」

◎エコラテックのシステムとは。一つの素材だけを使ったシステムなのか。

「エコラテックは当社が保有するボードを借りていたけど、いろいろものだが、展示が終了すれば、解体して再び当社が保管する。素材にはこだわっていない。現状は木材チップとプラスチック原料を使った再生複合材料「エコ・ロック」だけが、パーティクルボードなども有望な素材だと思っている。良いものがあればどんどん使っていきたい。当社はエコラテックを採用するのは一つの展示会で1社に限定しようと思っている」

◎映像・ビジネスなどを幅広く手がけるTYOグループの傘下に入ってから2年目となる。

「日本企業と取引しようとするとき、どうしても会社の規模がネックになっていた。円谷プロなどを傘下に収める上場企業のTYOグループに入って一番のメリットは日本の企業と取引する障害がなくなったことだ。15億円前後で推移していた年間売上高を、できるだけ早く30億円にまで引き上げたい」。